

担当教員名	山田 貴将	所属 (学部学科)	国際センター
実施年度・クォーター	2022・Q3		
授業名	南山	国際産官学連携 PBL C	
	パートナー	第2 課堂	
カテゴリ	ベーシック COIL	アカデミック COIL	<input checked="" type="checkbox"/> PBL COIL
パートナー教員名	張楠	パートナー所属	Tianjin Normal University 天津師範大学
参加	南山	13 名	
学生数	パートナー	20 名	
使用言語 (複数回答可)	英語	<input checked="" type="checkbox"/> 日本語	その他言語 ()
使用ツール (複数回答可)	Facebook LINE Skype YouTube Canvas <input checked="" type="checkbox"/> その他 (ZOOM, WeChat)		
交流内容 (概略)	<p>1. 概要</p> <p>2021 年度に引き続き、本プロジェクトでは、小島プレス工業 (株) から提供された「10 年後のクルマの形をデザインする」というテーマに関して、本学と天津師範大学 (日語系) の学生が以下の 1 から 5 の Step に従い、日本語を媒介言語として用いながら 8 週間に渡りオンラインによる国際協働に取り組んだ。</p> <p>【Step1】 課題提示 小島プレス工業から「10 年後のクルマの形をデザインする」という課題が提示された。</p> <p>【Step2】 オンライン協働 Step1 で提示された課題に対する解決策を提案すべく、南山大学と天津師範大学の学生が 8 週間に渡ってオンラインで協働した。</p> <p>【Step3】 教育的仲介 Step2 の期間中、担当教員は、学生と緊密に連絡を取り合い、モチベーションの維持を図ったり、グループワークの方向性を確認しながら、適宜、助言やフィードバックを与えた。</p> <p>【Step4】 プレゼンテーション 最終授業で 8 週間に渡る協働の成果をプレゼンテーション形式で発表した。</p> <p>【Step5】 評価及びフィードバック 小島プレス工業及び担当教員が評価シートに基づいてプレゼンテーションを評価し、フィードバックを与えた。</p>		

	<p>2. 参加者</p> <p>参加者 PBL C の参加者は、全体で 40 名であった（内訳は、南山大学 13 名、天津師範大学 20 名小島プレス工業（株）4 名、教員 2 名、TA1 名）。</p> <p>天津師範大学からの参加者は日本語を専攻する 1 年から 3 年次の学生であり、中級から上級レベルの日本語運用能力を有していた。同学では、本プロジェクトは、授業としてではなく「第二課堂（課外活動）」として位置づけられたため、ボランティアベースでの参加となった。一方、南山大学では、PBL C は共通教育科目（1 単位）として設置され、3 学部 4 学科（外国語学部・アジア学科、外国語学部・英米学科、総合政策学部・総合政策学科、経営学部・経営学科）の 2 年から 4 年次の学生が履修した。</p>
期間・回数	9 月 19 日～11 月 7 日
評価方法	提出物 30%、最終レポート 30%、授業内外での取組への積極性 10%、プレゼンテーション 30%
コメント	<p>天津師範大学の学生との協働型交流を通じて、本学の学生は、異文化コミュニケーション能力や国際感覚に加え、主体性も高めることができたと考える。その背景にある要因として、本プロジェクトの課題は、仮想のもではなく、優れたアイデアは小島プレス工業（株）が実際の商品企画の際に参考にする可能性がある、という意味で非常に高い Authenticity を有しているという点が挙げられる。自分達の発案したアイデアがもしかしたら企業の役に立つかもしれないという「リアル感」が学生の取組をより主体的にしたと言えるだろう。</p> <p>また、プロジェクト前後に本学の学生に実施した JAOS 留学アセスメントテストの結果からは、「傾聴力」が有意に伸長したことが示された。これは、本学の学生は、天津師範大学生と日本語でコミュニケーションを図る際に、自らが言語的に優位な立場にあることを認識し、言語ホストとして相手をより丁寧に理解しようと努めた結果と言えるかもしれない。国際化というと英語を用いたインターアクションがイメージされることが多いと思うが、海外には 300 万人を超える日本語学習者がいると言われており、実際のグローバルビジネスの場面では、シンプルな日本語を用いて（又は、シンプルな日本語と英語のバイリンガルで）、プロジェクトを進めていくケースも非常に多い。そのような点で、今回の天津師範大学との日本語による協働プロジェクトは非常に意義深い体験になったと言えよう。</p> <p>参加学生には本プロジェクトで身に着けた異文化コミュニケーション能力、主体性、日本語で海外の人々に関わるスキル等を活かして、今後も継続的に国境を越えて様々なことに挑んで欲しい。</p>